



Cantabile-1995
H1800×W3500×D1000mm
Ceramic
2019
撮影：椎木広

はじめに

本研究は、筆者が陶を素材として造形表現を行う際にあらわれる“流動するかたち”に着目し、陶を素材としたかたちの創造と価値とは何かを考察したものである。筆者はこれまで陶造形を制作する上で様々な技法の中、手びねりを主な技法として選択し制作を行ってきた。そして造形において、曲線や曲面の美しさを想起させるかたちを表現する試行を重ねる中で、自身が興味を惹かれる造形の根底に共通する要素があることに気づいた。本論ではこれを“流動するかたち”として認識し、それがどこから生まれてくるものなのかを確認した。そしてこれを、陶を素材とする造形表現における価値の一つとして捉え、現時点での自作を支える軸として今後の制作に還元していくことを目的とした。

第1章 かたちとは

本章では本論におけるかたちの認識の方法を提示することを目的とした。まず第1節では三井秀樹著『形之美とは何か』、加藤茂著『造形の構造』を手がかりとし、かたちの認識方法を(1) 定形のかたちと非定形のかたち(2) 人工のかたちと自然のかたち(3) 具象形体と抽象形体、の3つの分類から述べた。第2節ではかたちの美しさとは何か、人がかたちから美しさを感じ取る時そこではどのような交感が行われているのかについて、人間の感性の働き、かたちの美しさの条件の2つの観点から述べた。そしてその中から見えてきた共通する要素が、流動するかたちにどのように関わっているのかを考察した。ここから“自然の中にあるかたち”と、人間が美しいと感じるかたちには密接な関係性があることを示すことができ、自然の中にあるかたちと関わりを持ち暮らしていくことは、我々の感性が快適な状態を保つために必要不可欠であると結論づけた。そしてそれは、人間一人一人が生まれ育った風土の特色によって大きく差が出てくるのではないかと仮定し、第2章の日本の風土に繋げた。

第2章 日本の風土

本章では第1章での仮説を踏まえ、日本の風土について文献調査を行った。日本人にとって自然は、対抗する対象ではなく共生しているこうとする対象であり、共生していくためには、常に人が手を入れなければならないものであることが言えた。日本の気候の特色が日本人の文化形成にもたらしてきた影響は計り知れず、決して切り離して考えることは出来ない。そしてこれは芸術においても同じことが言え、このような日本人特有の寛容さ、自然に対する従順さが、筆者の考える“流動するかたち”の造形に対する意識に関係していることは確かである。まとめとして、日本の風土的特色である“自然と共生”しようとした暮らし方から“流動するかたち”は日本の風土と大きく関わっていると結論づけた。

第3章 流動するかたち

第1、2章を踏まえ、筆者が“流動するかたち”に当てはまると考える造形作家の例を挙げ、“流動するかたち”について述べた。筆者は造形表現において、自然の摂理によって作られた緩やかな川のカーブなどの、自然の中にあるかたちからヒントを得ることが多い。そのため自然の中にある非定形なかたちの、再現が困難である点、予測のできない点、どれひとつとして同じかたちが無い点に魅力を感じている。自然の中にある山、川、植物、動物、鉱物、天体といった全てが筆者にとっては造形のヒント足り得るものである。そこで、筆者が“流動するかたち”に当てはまるとして選択した木戸修、重松あゆみ、コンスタンティン・ブランクーシの3名による造形作家の言葉や作品を例に挙げて述べた。3人は素材、技法、創作の出発点はそれぞれ異なるが“自然の中にあるかたちから造形のヒントを得ている”ことを共通認識とし、かたちの根底には通じるものがあり、共通する造形の要素として“流動するかたち”の一端として捉えることができるとした。よって“自然の中にあるかたちから造形のヒントを得ている”こと、これが流動するかたちを考える際のひとつの基軸であると結論づけた。

第4章 中島晴美の言葉から

本章では陶造形作家中島晴美にインタビューを行い、自身の造形観との比較を通して“流動するかたち”について述べた。ここでは土を素材として扱うつくり手の、かたちに対するひとつの考え方に触れることで、自身のかたちの捉え方を見直すことを目的とした。そして中島が土という素材の特性からかたちの着想を得ているように、筆者の作るかたちも少なからず土という素材で作るからこそその造形であると考えられた。

第5章 修了制作報告書

本章では筆者が“流動するかたち”に繋がる“曲線と曲面の造形への関心”を自覚した2014年の作品から、修了制作作品《Cantabile-1995》に至るまでの流れを確認した。そしてそこから筆者のかたちの捉え方、考え方の変化を確認し、造形表現における“流動するかたち”の可能性について述べた。

おわりに

全章を通して、かたちはつくり手がどのように捉えるかによって造形の形式の枠を超え、表現のひとつの可能性として自立させることが可能になることが明らかになった。そしてこれは陶を素材とする造形表現における価値となり得るとし、“自然の中にあるかたちから造形のヒントを得ている”こと、これが流動するかたちの根底にあるものであると結論づけた。

